種まきサミット

ボランティア
地域交流

代表者：人文学部人文コミュニケーション学科　３年　大枝　俊貴

連携先

石塚サントラベル（株）

顧問教員

伊藤　哲司（人文学部・教授）

参加者

大枝　俊貴（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
袖山　良美（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
生田目　崇（人文学部人文コミュニケーション学科　３年）
岩崎　　彩（人文学部人文コミュニケーション学科　２年）
高橋　佑奈（人文学部人文コミュニケーション学科　２年）
飯塚子都香（人文学部人文コミュニケーション学科　２年）
田島　彩花（人文学部人文コミュニケーション学科　２年）
大川　日和（教育学部養護教諭養成課程　１年）
大村みるほ（教育学部養護教諭養成課程　１年）
鬼澤　麻美（人文学部社会科学科　１年）
河合　舞香（人文学部社会科学科　１年）
川崎　夏海（教育学部養護教諭養成課程　１年）
木暮　　聖（工学部都市システム工学科　１年）
鈴木　真由（人文学部社会科学科　１年）
高橋絵梨子（人文学部社会科学科　１年）
春山　陽介（教育学部情報文化課程　１年）
水戸部麻美（人文学部社会科学科　１年）

プロジェクトの概要

●背景

このプロジェクトの母体であるサークル「茨大東北ボランティアサークルFleur」は2012年創立以来、活動を継続する中で東北ボランティアバスへの参加者の減少・震災を知らない世代の増加といった問題に直面してきた。

また、行政の面でも2016年度をもって「集中復興期間」から「復興・創生期間」に移行し、大きな変化を見せた。このような状況の中で風化が進んでいくことは、震災における風評被害・支援の断絶・防災意識の低下を招く。

６年目という狭間の年に大学生だけで活動するのではない、世代を横断した活動が重要であると考えた。

●目的

東日本大震災を語り継ぐこと
参加者の防災意識向上

●連携方法

本プロジェクトでは、東日本大震災直後から現在までボランティアバスを出し続ける、石塚サントラベル(株)様との連携を行っている。

具体的な連携方法としては、大きく二点ある。一点目は、高校生への参加に関する声かけの段階にて助言を頂いた。2011年から続く石塚ボランティアバスには様々な人が参加し、持続的な活動を行っている。その中には高校生や中学生の姿もあり、今回プロジェクトを行うにあたりアドバイスをもらった。

二点目は、当プロジェクト参加者と実施する「東北ボランティアバス」に協力いただいている。すでに行った座学的な活動を超えて、実感として震災をとらえることができるような企画作りに助言頂いている。(2017年2月28日現在)

●活動日程

プロジェクト「種まきサミット」の流れは、取材と種まきサミット会に大別される。

・取材

取材段階では、東日本大震災により多大な被害を受けた福島県いわき市を中心とした視察を行った。2016年６月４日、12月４日、12月11日の計３回いわき市久之浜地区の復興商店街「浜風商店街」を訪れた。「からすや食堂」の御夫婦を中心とした皆様から被害状況などの説明をうけた。

2017年１月13日には、同地区の防災拠点施設や四倉地区「道の駅よつくら港」を視察した。この視察にはのちにサミット会で活動報告を行う、宇都宮大学学生プロジェクトUPのメンバーも参加した。

いわき市「浜風商店街」の皆様と

また、７月24日には、いわき市内の商業施設「いわき・ら・ら・みゅう」にて、いわき市観光物産センター様から被害状況や復興具合の説明を頂いた。同施設では、「2011 3.11いわきの東日本大震災展」も開催中であり、そちらの視察も行った。これらの取材成果は、種まきサミット会の展示や、会の内容に応用した。

視察「いわきの東日本大震災展」

取材内容を踏まえた展示

・種まきサミット会

会は、第一部と第二部に分かれる。

第一部では、宇都宮大学学生プロジェクト「UP」や笠間市絆プロジェクト・大洗応援隊・水戸市生涯学習センターヤングボランティア講座ボランティアバス参加者の方々にも出席頂き、活動発表や震災について専門性の高い座談会を行った。座談会は、「震災ボランティアのきっかけ」「震災ボランティアの中で最も印象に残ったこと」「復興のためにできること」をテーマとした。話題①「きっかけ」としては、自分の親族や姉妹の影響・大学で機会を得たなどといった意見が出た。話題②「最も印象に残ったこと」としては、被災地の人とのつながりや震災遺構についてなどの意見が見られ、体験の共有が図られた。話題③「復興のためにできること」では、午後のワークショップへの話題提供が行われた。

座談会の様子

第二部では、高校生も踏まえた震災に関するワークショップを開催した。ワークショップは、「クロスロード」と「ワールドカフェ」の二種類行った。「クロスロード」では、災害時の対応についてゲーム形式で意見を出し合った。「ワールドカフェ」では、第一部の座談会でも話し合った「復興のためにできること」について再度意見を出し合った。それぞれ発表を担当するなど、高校生の積極的な参加が見られた。

ワークショップの様子

また、当会について定期的に想起することを願いキャンドル作りも行った。

キャンドル作り

プロジェクトの成果報告

プロジェクト全体の成果として、一番大きいのは関係先を拡げることができたということだ。県外では、福島県いわき市「浜風商店街」の皆様との交流を深めることができた。茨城県内では、常磐大学高校の皆様・桜ノ牧高校JRC部の皆様・生涯学習センターの皆様と太いパイプを持つことができた。実際に、生涯学習センターでは同主催の催しである

「ネットワークフォーラム」にて活動報告を実施するなど連携が続いている。

また、種まきサミット会には、大学生19名、高校生13名、計32名が参加した。大学生のうち２名が宇都宮大学からの参加、高校生は５校からの参加となった。参加者からは、第一部について、

「今日の体験を通して、震災のボランティアの活動でどのようなことが行われているのが分かりました。3.11からもうすぐ6年が経過しますが、今日の経験を活かし、震災での教訓を忘れないようにしたいです。」

「震災から６年が経ち、忘れかけていたことや、改めて考えさせられることが多くあった。やはり、東日本大震災を忘れてはいけないし、まだまだ自分ができることもあるんだなと思いました。」第二部について、「学校が違うだけでなく、年齢までも違う方々とここまで、話し合う場というのはとても少ないと思うので、今日はいい体験ができました。」

「最初は種まきサミットって何だろう？と考えていたのですが震災についての話し合い、自分が普段思っていたことを発言できたり、他の人の考えと自分の考えを共有できたのが楽しかったです。また茨大生、宇大生、ボランティアに参加した高校生には行動を移すことの大切さを学びました。また機会があったらぜひ参加したいです。」といった感想を得ることができた。震災について深く考え、行動に移す機会を創出できたと考えている。

また、当プロジェクトに参加した高校生2名と、連携先の石塚観光の協力で３月11日、12日に「震災スタディーツアー」を企画している。これは、会の中で「復興のためにできること」として出た”直接被災地に足を運ぶ”、”今の復興の進み具合を知ってもらう”という意見から、企画されたものだ。このように、震災ボランティアについて高校生や他の年代を巻き込んでの活動につなげることができたことは大きな成果であった。

・今後の課題

今回は、高校生をメインの対象としたが、「震災を知らない世代」はもっと低年齢層にある。このような世代に震災を語り継いでいくことが可能な仕組み作りや関係の構築を行っていかなければならない。

また、今回のような活動を単発で終わらせるのではなく、継続的な活動としていかなければならない。

種まきサミット会参加者